



公立学校共済組合
四国中央病院

日本医療機能評価機構認定病院

しこく

ホームページアドレス <http://www.shikoku-ctr-hsp.jp/>

第46号

2011年12月

住所: 愛媛県四国中央市川之江町2233番地 TEL(0896)58-3515 FAX(0896)58-3464



川之江秋祭りの太鼓台

今月のもくじ

- ◇巻頭言 この頃思うこと 三島医療センター長 西山誠一 2・3
- ◇診察室だより 産婦人科から 産婦人科部長 濱田信一 4
- ◇行事だより 第3回糖尿病フォーラム 4
- ◇部署だより 安心でやすらげる治療を目指して～がん薬物療法… 薬剤部 松原栄治 5
- ◇地域連携だより 開放病床登録医師のご紹介 6
- ◇新任職員紹介 6
- ◇ひろば MP対策の院内研修に参加して 教育研修委員長 相原 泰 7
- ◇院内のできごと 8
- ◇表紙のことば～川之江秋祭りの太鼓台～ 8
- ◇編集後記 8

病院理念

【真心・信頼・連携・思いやり】

広報誌

しこく

第46号 発行平成23年12月18日
編集 四国中央病院広報・年報委員会
e-mail s-tyuou@shikoku.ne.jp

この頃思うこと



三島医療センター長
西山 誠 一

三島医療センターがスタートして約1年6ヶ月が経ちました。「今はどうなっているの?」「今後どうなっていくの?」との疑問をお持ちの方も多いかと思います。結論を先送りにして手探り状態を続けているところもありますので、実態がよく見えないかもしれません。この機会に三島医療センターを取り囲む状況について考えてみました。

旧・愛媛県立三島病院が移譲される過程では多くの意見があり、地域医療再生を目指した協議会では地域の救急医療の中で三島病院はどのような役割を果たすべきか議論されました。その後、三島医療センターとして船出しましたが、四国中央病院と一体になって運営に当たること、内科を中心として整形外科の応援を得ながら診療を行うこと、内科系の二次救急については三島医療センターでも行うことなどの基本方針はあるものの、実際にどうすれば良いのかははっきりしていませんでした。地域の中核としての機能を引き継ぎ積極的に対応したいとの意見がある一方で、必要最小限の機能だけを残し縮小して運営すべきとの意見もありました。

常勤医師が2名では、バックアップがよほどしっかりしていないと地域に認められる医療を行うのは困難です。当直やオンコールを含めた負担は過重なものがあります。コメディカルは高い意識で取り組み、医療機器などは恵まれた環境にありますが、規模が縮小され機器や備品が持ち出されることが続くとモチベーションの維持が困難であったり不安が広がったりしてしまいます。移譲された側の病院として仕方がないところですが、目の前でおこると辛いところがあります。四国中央病院と三島医療センターとの間の人事交流を活発にして対応しようとの方針ですが、川之江と三島の間の7 km は、ずいぶんと距離が長いようです。

そもそも、地域は三島医療センターをどのように見ているのでしょうか。旧・三島病院が持っていた機能を失うと地域が大変だとの前提で取り組んで来ましたが、果たして地域にとって本当になくってはならない病院なのかとの疑問も無くはありません。外来に通院されているのは従来からかかっておられた近くの高齢者の方が大半で、入院の患者

さんたちは施設などを経由した寝たきりに近い方が目立ちます。ときには、「三島病院って、まだやってたの？」などと聞かれることもあります。自力で他所に出かける交通手段を持つ人達にとっては、疑問は的外れではないのかもしれませんが。

医療崩壊と言われ続けていましたが、最近は少し耳にする機会が少なくなったように感じます。大学の研修医などが少しずつ増加の傾向にあるためかもしれません。三島医療センターでは和田医師と藤川医師が新たに赴任され、常勤内科医が4名の体制になりました。消化器の分野での診療機能が格段に向上し、病院としての特徴も出していける糸口が見えたかと感じています。しかし、地方の医療圏が抱えていた様々な問題は解決したわけではありません。医師の恒常的な増加は見込めませんし、看護師不足も深刻です。地方の病院が生き残るためには、常に、新たなチャレンジ・新たな改革に取り組まなければなりません。三島医療センターも新たに舵を切り直し次のステップに入る時期に来ています。

目標は四国中央病院と三島医療センターを一体とした新たな病院を建設して診療に当たることです。これは必ず実現しなければならないことで、資金の問題なども含めて本部と粘り強く折衝を続けています。その構想が実現するまでの間は、現実的な対応が必要です。お互いの連携を密にし、協力し合って診療にあたるのが今まで以上に必要です。例えば、整形外科では四国中央病院で手術をして三島医療センターでリハビリを行う、循環器や消化器では互いに人が交流して検査や治療を行うなどしていますが、このような状況をより広く進める必要があると感じています。その中で診療機能を分化して、お互いが受け持つ役割をはっきりさせることが必要です。そのために現在の三島医療センターのあり方とは違った診療機能を受け持つことがあったとしても、それは享受すべきものかと思っています。

「何故そこに居るの」「何時までそこに居るの」と問われることがあります。私自身にも分かりません。ただ、乗り続けていたら雨に打たれたり風に吹かれたり時には嵐にあったりするだけだと分かっているのに降りることが出来ないことはあります。・・・と言うより、安全な場所に入港するまでは下船出来ません。私の役割はそこにあるのかなと思いつつ、この文章を書いています。



産婦人科

産婦人科部長 濱田 信一

産婦人科は女性の一生にあわせて、小児期・思春期・成熟期(出産、育児を含む)・更年期・老年期をトータル的にサポートします(産湯から老後までのケア)。現在4人の産婦人科常勤医師で外来診療を担当しています。平日は、手術日(火曜日と木曜日の午後)以外は午前・午後共に2診制で行っています。産婦人科は予定外の緊急手術などが非常に多いので、時に外来を一時中断したり担当医が代わって代診することもあり、ご迷惑をおかけする事があります。

産婦人科は24時間いつでも対応しています。休日や夜間においても状態が変化した場合はご連絡下さい。

行事だより

世界糖尿病デー

糖尿病の脅威が世界規模で拡大しているのを受け、国連は、11月14日を「世界糖尿病デー」としました。この日を中心に、糖尿病に対する関心を高め、治療と合併症の予防に積極的に取り組み、コントロールする意欲を高めようとさまざまなキャンペーンが実施されています。



第3回 四国中央病院 糖尿病イベントの開催

11月18日(金)9時30分から当院玄関ホールにて、『糖尿病イベント』として医師、看護師、栄養士、薬剤師、臨床検査技師などの協力の下に一般市民への啓発活動を行いました。内容は市販されているペットボトルに含まれる砂糖の量の展示、ダイエット食品の展示などを行い、また糖尿病患者へのインスリンの説明や希望者への血糖測定などを行い、それをもとに医師が説明を行いました。午前中だけでしたが、多くの一般市民の参加があり、大変盛り上がりました。

午後からは第9回四国中央病院市民公開講座として県立新居浜病院内科医監部長糖尿病専門医南尚佳先生をお招きして『メタボと糖尿病の関係～糖尿病予備軍といわれたら～』を講演していただきました。内容は、いろいろな病気の治療法や予防法についてで、初心者にもわかりやすい講演内容でした。講演時間の1時間が盛況のうちに終了しました。来客数は40名程度でした。

来年も皆様に参加していただけるイベントを開催します。ご期待ください。

安心してやすらげる治療を目指して

～がん薬物療法～

薬剤部 松原 栄治

現在、がんは、わが国においてもっとも身近な病気となっています。日本人は一生の間に2人に1人ががんになる可能性があり、3人に1人はがんで亡くなっています。しかし、抗がん剤による治療(化学療法)の成績は年々進歩を遂げ、がんの中には化学療法だけでもかなりの治療効果が得られるようになってきているものもあります。がん治療では医師、看護師、薬剤師などの医療関係者がチームを組んで患者様の治療にあたる『チーム医療』が一般的になりつつあります。

これから抗がん剤による治療を受けられる患者様がより安全に、安心して抗がん剤の治療を受けていただくために、当院の薬剤部で行っている化学療法に対する取り組みを紹介します。

抗がん剤は一般薬と比べて、『治療に効果的』な薬の量と『副作用』が現れる可能性がある薬の量が近接あるいは重なっていることにより、わずかな投与量の違いによっても重篤な副作用が現れてしまう可能性が高いことが知られています。抗がん剤は治療効果と安全性を高めるため、投与量、投与期間、休薬期間、投与順序、投与経路、併用薬剤などが厳密に規定され、また副作用を防ぐことを目的とした薬の併用療法(支持療法)も行われていることから投与方法はより複雑化しています。

これに対応するのが『レジメン』すなわち、がん薬物療法における抗がん剤、輸液、支持療法などの薬剤の用法、用量、投与スケジュール、投与期間を具体的に定めた治療計画による管理です。当院では、病気別にレジメンを集め、それぞれの患者様別に『抗がん剤の投与スケジュール票』を作成し、管理を行っています。これにより、本来投与されるべき抗がん剤が過量投与されるケースや、似た名前の抗がん剤のオーダーミス、併用してはいけない抗がん剤を同時に投与してしまうなど、さまざまな医療事故を未然に防ぐことができます。

また、レジメン管理を行うことで、それぞれの患者様の投与スケジュールが把握できます。このことにより、患者様が化学療法を受ける前に副作用の対策がとれます。薬の種類や量、治療にかかる時間、副作用の症状、いつくらいに現れて、どれくらいで治るか、また症状がでたときの対処法などをあらかじめ説明することで、安心して治療を受けられるのではないかと考えています。

当院は平成22年11月より化学療法を受けられる患者様専用の治療スペースを設けました。その部屋は壁紙やカーテンの色にも配慮し、アロマや音楽を取り入れることで、患者様によりリラックスして治療を受けていただくための環境を提供しています。

このような取り組みの甲斐もあり、平成23年11月には愛媛県がん診療連携推進病院の指定を受けることができました。

これからも私たちスタッフ一同は、患者様が安心して薬物治療を受けられるように、日々努力してまいります。ご不明な点などがあれば、遠慮なくご相談ください。



～ 開放病床登録医師のご紹介【第5回】～

当院の開放病床に登録された先生方からご紹介いただいた患者さんには、ご紹介の先生と当院の医師とが共同で診療を行っており、入院前から一貫した医療をご提供しています。



吉崎医院

登録医：吉崎健一
住 所：四国中央市金生町山田井木戸ノ脇 97 番 1
電話番号：0896-59-1668
診療科：内科、婦人科

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
午前 9:00～12:00	○	○	○	○	○	○	×
午後15:00～18:00	○	○	×	○	○	×	×



四国中央病院には検査や重症患者の受け入れでも何時も的確に対応していただき有り難うございます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

開放病床登録医に登録させていただいておりますが、まだ一度も院外主治医として訪問したことがありません。紹介、訪問、指導料、管理料等、一挙手一投足が逐一カウントされる今の保険制度にうら寂しいものを感じています。

勤務医の頃、徹夜で重症患者の処置をしても翌日平常勤務出来たのは、若さのせいもありますが、患者さんや家族から感謝の声があったからだと思います。今は複雑化する一方の保険制度、モンスタークレイマー等を相手に真摯に頑張っておられる病院職員の方々に敬意を表します。これからも宜しくお願いします。

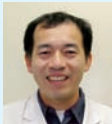


福田医院

登録医：福田 保
住 所：四国中央市下柏町 345
電話番号：0896-23-2188
診療科：内科、消化器科、循環器科、小児科

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
午前 9:00～12:00	○	○	○	○	○	○	×
午後13:00～18:00	○	○	○	○	○	×	×

※土曜日は9:00～13:00



四国中央病院には父子二代にわたり、今でも妻が週1回お世話になっております。また、困った時にはいつも助けていただき感謝しております。当医院は、私・父・家内が医師、母・姉は薬剤師として、一家総出で診療しております。内科(消化器科、循環器科)、小児科を標榜しており、介護型病床も細々ながらしております。

私自身はマラソン、特に長距離を趣味にしており、フルマラソンは約20回、100kmマラソンは12回完走しております。しょっちゅう走っておりますので、病院内より道端でこの顔を見かけることが多いと思います。その際は気兼ねなく一言おかけください。

新職員紹介

(平成23.9～11月採用者)

新規採用医師

藤川 晴信	内科医長 (三島医療センター)	地域の皆様に信頼される医療を職員の皆さんと共に続けていきたいと思っておりますので宜しくお願いします。専門は消化器科、内科です。
堀川 洋子	医事係員	皆様にご迷惑をおかけする事も多々あると思いますが、日々学んで勤めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。
坂田 綾子	看護師 北2階病棟	信頼される看護師になれるように精一杯頑張ります。よろしくお願い致します。
高石 誠	看護師 南館病棟	スタッフ、患者様から信頼される看護師を目指し頑張っていきたいと思っております。よろしくお願い致します。
山川 徳子	看護師 北3階病棟	緊張感を持ち、日々看護の勉強を怠らず、一日も早く業務を覚えたいと思っております。皆様からのご指導よろしくお願い致します。
高橋 里美	看護師 内視鏡室	一日でも早く仕事を覚え、スタッフの方々、先生にいろいろ教わりながら、少しでも皆さまのお役に立てるよう頑張っていきたいと思っております。よろしくお願い致します。
合田 悟史	看護師 北5階病棟	これまでに経験したことのない業務内容に緊張の毎日ですが、一日でも早く業務の流れを覚えて動くことができるよう頑張ります。よろしくお願い致します。

モンスターペイシエント対策の 院内研修に参加して —誰もがモンスターになりうる恐怖—

教育研修委員会 相原 泰

平成23年11月11日院内研修として「医療従事者のためのモンスターペイシエント(以下MP)対策」が行われました。講師の先生はJA徳島厚生連阿南共栄病院産婦人科部長滝川稚也先生をお招きしました。先生は勿論現役の臨床医ですが、本年8月「モンスターペイシエント対策ハンドブック」の著書を刊行されました。

近年モンスターと呼ばれる患者が増加し、全国の医療施設においてこのような患者からの暴言・暴力によって医療スタッフが精神的・肉体的に傷つく事例が多発し大きな社会問題となっております。これは背景に、昨今の医療技術の進歩に対して患者側が過度の期待を抱き理不尽な要求や不満を訴えることや、国の医療費抑制策による医療崩壊が医療現場のスタッフの長時間・過重労働を招く医療環境の悪化などが指摘されています。

滝川先生が今回の講演の中で特に強調された点を2つ挙げてみます。

第1点はMPの類型です。MPには3つのタイプがあり、①職業的なMPで暴力的行為による利益獲得が目的のマル暴関係者②メンタルヘルス的問題を抱えた患者で精神疾患・情緒障害や薬物依存者③ごく普通の患者で些細な意思疎通の手違いでモンスター化する人、に分類されます。同じMPでも①や②の患者は明らかに警察など外部との連携が必要であり、とても個人や病院組織だけで対応できるものではありません。私たちが日常診療でMPに遭遇した時に対策を講ずるためには、まずMPの分類をしなければならないということです。

第2点は対策です。私たちが主に対応できるのは③の患者であり、そのための対策として日頃からの患者・家族とのコミュニケーションや正確な情報の共有・伝達に努めなければなりません。患者は基本的には身体的・精神的障害を抱え込む弱者であるケースが少なくありません。MPをただ排除することが目的ではなく、普通の患者をMPにしないこと、さらにMPと化した患者を普通の患者に戻すことを常に心がけていかなければなりません。このような努力を怠れば、私たち医療従事者自身が患者にとって逆にモンスターになるかもしれないのです。

最後に先生の「最前線の医療スタッフを守るのは病院の責務であり、スタッフが安心して働けることにより、より質の高い医療サービスを患者に提供できる」というメッセージは崇高な理念として心に深く刻まれました。また、病院全職員が団結しMPには組織として毅然と対応することが再確認できました。今回の研修会を企画いただきました森本病院長に深謝致します。



院内のできごと (H23.9~11)

- 9月22日 院内研修会「古くて新しい感染症―結核を考える―」
愛媛県総合保健協会附属診療所所長 西村一孝先生
- 10月 5日 院内TQM中間報告会
- 10月17日 院内研修会「抗がん剤勉強会」
- 10月18日 院内研修会「肝臓疾患について」
- 10月26日 災害派遣医療チーム(DMAT)研修に5名参加
~29日
- 10月28日 第47回中央病院学会(九州中央病院)
~29日
- 11月11日 院内研修会「医療従事者のためのモンスターペイシェント対策」
JA徳島厚生連阿南共栄病院 滝川稚也先生
- 11月18日 市民公開講座「メタボと糖尿病の関係～糖尿病予備軍といわれたら～」
愛媛県立新居浜病院内科医監部長 南 尚佳先生
- 11月19日 院内研修会「看護師の必要なビジネススキル」
西武文理大学看護学部客員教授 北浦暁子先生



平成23年11月1日付けで「愛媛県がん診療連携推進病院」の指定を受けました。
次回発行の広報誌にて詳しくお伝えいたします。

■表紙のこぼれ ～川之江秋祭りの太鼓台～

当院の地元、四国中央市川之江町の秋祭りは、江戸時代からの古い歴史と伝統を持っており、現在は毎年10月13日から15日の3日間、行われています。

川之江城を見上げながら、豊漁・豊作に感謝し、川之江港付近をゆったりと太鼓台が進んでいるところを撮影しました。四国中央市は製紙の町としても有名ですが、川之江城の向こうには、その象徴である製紙工場の煙がたなびいています。

太鼓台といいますが、勇壮・華麗、あるいは喧嘩(鉢合わせ)というイメージを抱く方が多いかもしれません。確かに太鼓台同士が集まると派手なパフォーマンスが行われ、秋祭りは盛り上がります。しかし、秋祭りの大部分は、地元の道を太鼓台が練り歩く純朴なものであり、このような昔ながらの情景こそ大切にしたいものです。

今年の秋祭りは残念ながら天候に恵まれず、写真の太鼓台にも一部シートがかかっていますが、秋晴れの中を運行する太鼓台本来の美しさには、誰しも目を奪われることでしょう。ぜひ一度当地へ足を運んでいただき、実際にご観覧ください。ただし、交通渋滞にはご注意ください。(写真・文 窪田)

■編集後記

12月の師走を迎え、平成23年も終わりに近づきました。今年は千年に1度とも言われる未曾有の大震災に遭遇し、政府の復興計画とは裏腹に今なお被災地では多くの方々が難儀を強いられています。人災としての原発事故も抱え出口のない暗闇に閉じ込められた感もぬぐえず、1日も早い復興を祈るばかりです。

今回の巻頭言には三島医療センター長の西山先生にお願いいたしました。四国中央市の医療を取り巻く状況はなお厳しく、当市に将来「中核病院」を作る構想を実現させるためには、本院とセンターとの更なる連携の必要性を指摘されておられます。病院長の提案によりモンスターペイシェント対策の院内研修が開催され多くの職員のみならず院外からの参加者も加わりこの問題の関心の高さが伺われました。薬剤部からは化学療法に対する取り組みが紹介されましたが、当院が本年11月に愛媛県がん診療連携推進病院に指定されたことでその重要性はますます高まることでしょう。

そろそろインフルエンザのシーズンが到来いたします。ワクチンの接種は済まれましたか。平成24年が皆様にとりましてよき年であることを心よりお祈り申し上げます。(文責 相原)